

鄭成功から和藤内へ

— 近松の『国性爺合戦』を中心に —

崔 官*

目次

1. 東アジアにおける鄭成功
2. 近松の『国性爺合戦』
3. 壬辰倭乱（文禄の役）との関わり
4. 中国の鄭成功から日本の和藤内へ

1. 東アジアにおける鄭成功

鄭成功（Zheng Chenggong; 1624–62）は周知のとおり、中国の明清交替という風雲の時期を生きた一世の英雄であり、今日でも中国や台湾で高く評価され、崇拜されている。台湾で鄭成功は異民族である清と争った漢民族の英雄であり、同時にオランダ軍を追い出し、台湾を開拓した功績により死後、開台聖王として神格化されている。台湾では文官としてのイメージが強いが、中国大陸では武將としても評価され、特に「台湾解放」という側面が重要視されているようだ。また日本でも近松の『国性爺合戦』のモデルとして有名な人物である。

鄭成功の元々の名前は鄭森、幼名は福松で、日本の平戸にて、海上貿易をしていた鄭芝竜と日本人田川七左衛門の娘との間に生まれた。鄭芝竜の嫡男である。7歳の時、中国に渡り、成長した鄭森は南京の国子監に入学した。当時、父親の鄭芝竜は明末期の朝廷から呼ばれ、高官になった。ところで、時は明清交替の混乱期に入る時期だった。李自成の反乱と後金（清）の攻撃により、結局皇帝は自殺し、首都北京は満州族の手に落ちた。華北地方を掌握した清に対抗して、華南地方では生き残った明王朝の皇族を立て熾烈な戦闘を展開中だった。いわゆる反清復明、あるいは滅清復明の運動が各地で起きていたが、その中で鄭氏父子の運命も決まる。鄭芝竜の支援を得た唐王朱聿鍵は1645年、明の正統を引き継ぐ隆武帝として推戴され、この時鄭成功は隆武帝から国姓である「朱」氏という姓と「成功」という名前を下賜される。この後、鄭成功は国姓爺とも呼ばれ、明朝再建のために忠誠をつくし奮闘努力するが、隆武帝軍の北伐

* 高麗大学校日本研究センター所長 高麗大学校文科大学日語日文学科教授

が失敗に終わると、父鄭芝龍は清に投降してしまう。しかし鄭成功は抵抗運動を続け、1652年には延平王に封じられ、延平郡王とも呼ばれるようになる。鄭成功は野心を燃やした南京攻略作戦が失敗すると、台湾に目を向け、当時台湾を支配していたオランダ軍を奇襲攻撃で追い出し、台湾を掌握する。すでに東南アジアや日本との海上貿易で強大な力を所有していた鄭成功は、台湾を足場に反清復明運動の復興を試みたが、台湾進出後わずか1年余りの1662年に39歳で病死し、彼の家督は息子鄭經に引き継がれる。鄭成功の明朝再興という夢は彼の孫が清に降伏することで挫折してしまうが、忠義を尽くした彼の一生は後世の多くの人々の胸を打つこととなる。

このような中国の英雄鄭成功は、死後50余年が経った時点で、近世日本において作品化され新しく生まれ変わる。すでに近世日本で鄭成功は、中国人の父と日本人の母の間に生まれた混血児であるという点、鄭氏父子が数回にわたって江戸幕府に援軍派遣を要請したという事実、そして実際鄭氏の影響圏下の貿易船が長崎で活発な交易をした点など、様々な関連によって日本社会の関心の対象になっていた。このような状況で1715年、近松門左衛門は鄭成功をモデルにした人形浄瑠璃の名作『国性爺合戦』を上演し、大成功をおさめるに至ったのである。

2. 近松の『国性爺合戦』

『国性爺合戦』は日本のシェークスピアと呼ばれる近松の晩年を輝かせた代表作として知られている。時代物の代表作というだけではなく、いくつかの著しい特色によって日本文学史で高く評価されている作品である。その主な特色とは、第一に、日本と中国を作中舞台としたスケールが大きい作品である点だ。同時に作中人物として明国人、韃靼人、日本人、明と日本の混血人が登場する日本文学史では珍しい風変わりな作品という点だ。鄭成功に関する歴史的事実を17世紀後半に刊行された『明清闘記』を通じて知ようになった近松は、まさにこの鄭成功をモデルにして、日本（和）にも中国（唐）にもないすぐれた人物という意味の名前を持った和籐内という人物を新たに創出し、この主人公和籐内の日本、中国での活躍を描いた作品を作り出した。

第二に、従来は段と段の間に挿入された間狂言が、本作品から廃止されたという点をあげることができる。五段になった作品の全体構成がそれだけ引き締まり、各段の展開が緊密化し、事件の流れと直接関連のない間狂言の入ってくる余裕がないくらいに、劇的完成度が高い作品になったといえる。

第三に、1715年11月大坂竹本座で初演されて以来、足掛け3年おおよそ17ヶ月間連続上演という長期興行記録を打ち立てるが、当時の大坂の人口約30万のうち80%が見に行ったと言われ

るほどの空前の大成功をおさめた¹⁾。

本作品の成功原因と背景に関して日本では、「この作品には積極消極の両面にわたって人間の力が最大限発揚されるさまを見ることができる」ためだとしたり²⁾、「(鎖国下の) 状況の中で海外で雄飛し大活躍する話は開かれた時代の人々には想像することができない解放感を鬱積された当時の人々にもたら」し、「日本文物の師匠としての中国への尊敬、長崎を通じた貿易によって一般大衆にも中国が少なからぬ関心と憧憬と魅力の対象になった」という点などを提示している³⁾。すなわち日本の先行研究は、主人公として活躍する和藤内が持った特性や、あるいは当時鎖国下の大衆の心理や中国への関心などを指摘しているが、これと違い本発表では、東アジアの観点から朝鮮との関連性に焦点を合わせる。

3. 壬辰倭乱（文禄の役）との関わり

近松門左衛門（1653-1724）の主要経歴を調べて見ると、彼が豊臣家に仕えた武家の出身である点と、京都を去り竹本座の本拠地である大坂で後半生を送った事実が目を引く⁴⁾。大坂は豊臣秀吉のもとで飛躍的に成長した都市として、豊臣家の滅亡後も太閤秀吉に対する崇拜の雰囲気

1) 寺尾善雄『鄭成功』（東方書店、1986）236頁。竹本義太夫が1684年竹本座を創設したさい開場作品として近松の『世継曾我』を上演するほど、もともと二人は緊密な関係を維持し、その後死ぬまで数十年間協力して浄瑠璃繁栄の一時代を築いた。1714年義太夫が後継者を竹本政太夫に決めて死亡した後、竹本座はすぐ財政的危機に陥った。その時、座の長老だった近松が政太夫のために座の運命をかけて筆を執った作品がまさに『国性爺合戦』だ。本作品の爆発的な上演成功によって竹本座は再起することができ、座の長老としての近松の位置は確固不動たるものになった。

2) 重友毅「『国性爺合戦』の成功について」『重友毅著作集 近松の研究』第三卷（文理書院、1972）。

3) 寺尾善雄『鄭成功』前掲書、237頁。

4) 近松の本名は杉森信盛であり、1653年（承応2年）越前吉江藩の武士だった信義の次男として福井で生まれた。元々杉森家は京都の公家だったが、近松の高祖父の代から武士に変わった。曾祖父は戦国時代末期に近江地方を掌握していた浅井長政に仕えて杉森に改姓し、名門浅井家が織田信長によって滅ぼされた後に祖父は豊臣秀吉と彼の甥である秀頼に仕えた。大坂城が陥落した後には稲葉守正則に出仕し、次男として生まれた近松の父信義は分家し、越前藩松平忠昌の家臣になった。また忠昌の死後には越前の支藩である吉江に仕えるようになり、これによって幼い近松は3歳から12歳まで吉江で家族とともに幼年期を過ごすようになる。その後父が浪人の境遇になってから近松も順調ではない青少年期を送るようになる。

かつて坪内坪造が指摘したように〔斎藤一寛「近松とシェイクスピアの対比」『坪内逍遙と比較文学』（二見書房、1973）参照〕、シェイクスピアと同様若い頃に不透明な点がたくさんあるが、京都に来て貴族の雑務を担当しながら教養と文学的素養を積んだと推測されている。ついに青年近松は代々伝わった武士の身分を捨てて当時軽視された芸能世界に身を投じる。25歳頃までは宇治加賀掾の下で浄瑠璃作家として修行を積み、徐々に劇作者としての地位を築く。近松50歳の1703（元禄16）年、最初の世界物である『曾根崎心中』の成功をきっかけに竹本座の専属作家になり、1706年には居住地を京都から竹本座がある大坂に移す。以後、竹本義太夫のために時代物と世話物の両方にすぐれた作品を提供していたが、義太夫の死亡により竹本座が深刻な危機に遭遇すると、『国性爺合戦』を書き竹本座を再興させた。以後1724年に生涯を終えるまで彼は大坂で20余年を過ごした。

が最も多く残っている所だった。近松が1719年朝鮮通信使の訪日に合わせて上演した『本朝三國志』は壬辰倭乱を扱った作品であるが、そこで豊臣秀吉を「男神功皇后」と崇拝して描いていること⁵⁾も大坂のこのような雰囲気と彼の家柄の伝統によるものと見受けられる。

また1718年に日本を訪問した申維翰の『海游録』に、大坂と京都を流れる淀川の近くに「晋州島」という名前が付いた島があるが、この島には壬辰倭乱の時、晋州城の戦鬪から連れてこられた朝鮮人たちの子孫が集まって住んでいるという、日本人の説明が記録されている⁶⁾。これは壬辰倭乱が終わってから100年をはるかに過ぎた18世紀初に至っても、日本人たちが朝鮮の連行者の子孫たちと一緒に暮し壬辰倭乱を意識していたということであり、同じ時代、同じ社会に生きていた近松は、このような事実を十分に認知していたと考えられる。

『国性爺合戦』が当時清に変わった中国大陆を強く意識して日本人の対外認識を表出した作品であることを考慮してみる時、作品の至るところに日本対朝鮮・明が激突した壬辰倭乱の記憶が反映されていることがわかる。例えば作品二段では、壬辰倭乱の時に朝鮮で日本軍が行った虎狩りが、作中舞台である中国で和藤内が行ったように変容されて出ている。周知のように日本には虎がいなかったが、壬辰倭乱の一時期、朝鮮にいた日本の武将たちが秀吉や朝廷に贈った風変わりな重要献上品として虎が珍重されたことがある。これによって再び武将たちの虎狩りが各地で行われ、その中でも加藤清正の「虎退治」伝説は近世日本社会に広く広がっていた。このような壬辰倭乱当時の虎狩り話を、近松は中国での和藤内の虎狩りとして巧みに変形させ、本作品の中にかしたと把握される。神国日本の威力を持って和藤内が虎を屈服させる場面を、近松は次のように描いている。

神力が付け加えられた日本の力。刀で対敵するのは大人らしくない。虎は言うまでもなく、象や鬼でも一度に打ち倒す。(中略) 和藤内。神国に生まれ神より受けし身体髪膚。畜類に出会ひ、力だてして怪我するな。日本の地と離るとも、神は我が身に十川、太神宮の御祓ひ納受などかなからんやと。肌の守りを渡さるれば、げに尤もと押しいただき。虎にさしむけさしあぐれば。神国神秘のその不思議、猛りにたけるいきほひも。忽ち尾をふせ耳をたれ。じりりじりりと四足を縮め。恐れわなき岩洞に隠れ入る。(中略)

尊の天照神の威徳ぞ有がたき⁷⁾。

5) 近松門左衛門の『本朝三國志』[1719(享保4)年2月14日、大坂竹本座で初演]は、太閤記物の嚆矢として注目される。そのうち4段、5段は壬辰倭乱当時の日本人の立場で朝鮮での様相を再現した。5段の題目が「男神功皇后」になっており、この前の4段でいわゆる「神功皇后の三韓征伐」の戦勝を受け継いで秀吉が三韓征伐に由来する住吉神社を参拝をするという内容が描かれていることから、近松が明確に神功皇后の系譜に連なる存在として秀吉を崇拝していることが窺える。拙稿「近松門左衛門の『本朝三國志』に関する考察」『日本文化学報』3集(韓国日本文化学会、1997.10)参照。

6) 申維翰『海游録』『海行摠載』第2輯(民族文化推進会、1985、韓国)134頁。

7) 『近松門左衛門集3、国性爺合戦』『新編日本古典文学全集』(小学館、2000)291、292頁。

以上のように和藤内は、神国日本の加護を受けている日本人として描かれている。秀吉や壬辰倭乱に対する近松の認識は、本作品の成功に力を得て作った後続作である『国性爺後日合戦』（1717年）にもはっきりと現われている。すなわち『国性爺後日合戦』の初段で和藤内の活躍を、朝鮮に日本の武威を示した秀吉のそれにたとえているのである。

兵吉（秀吉を意味する）とやらんいふ者。才智武勇かねそなへ。数々度の軍功武辺かうみやう古今に独歩し。60余州を掌握し位関白にへあがり。武辺のあまり朝鮮国を切とらんと数百万の日本ぜい数千艘の兵船をうかべ。大風洪波を乗ふせ乗わけ。釜山浦の港にせめ入⁸⁾。

このように近松は中国における和藤内の活躍を、まるで壬辰倭乱を起こし日本の武威を東アジアに輝かしたと彼が考える秀吉と比べ、露骨に記述している。和藤内は中国の鄭成功とは違い、秀吉のような人物に変容させられているのだ。

4. 中国の鄭成功から日本の和藤内へ

中世まで日本人の世界観は本朝、震旦、天竺の三国世界観だった。ここで本朝は日本であり、震旦は大陸すなわち朝鮮を含んだ中国を示し、天竺は仏教のメッカとしてのインドを言う。ところが16世紀になると、大航海時代の余波による西洋人の到来と日本人の活発な海外進出などの一連の事件は、このような既存の世界観にも変化をもたらした。

特に壬辰倭乱で朝鮮、明との戦争をし、その後中国で漢族の立てた明が亡び満州族の支配を受けるようになるなど東アジアの国際社会が根本的に変貌する中で、日本人の対外認識は日本中心主義的傾向を帯びるようになった。ここにいわゆる神功皇后の三韓征伐の神話、モンゴル侵攻時の神風、豊臣秀吉が対外的に標榜した日本を優越視する日本中心の世界観などから、すなわち日本型華夷意識が形成されていったのだ。これによって日本古来の三国世界観は次第に本朝、唐、西洋に変化し、朝鮮、アイヌ、琉球などは蔑視される形態に変わっていった。

このような日本中心の華夷意識に立脚し近松は、中国の鄭成功を借りて来て日本の和藤内を作り出したのだ。和藤内の中国での勇猛と活躍をすべて日本の神力の功德として表現しており、神国の守護神である天照大御神の威力を誇張して提示している。和藤内が中国で行った虎狩りに関する描写だけではなく作品の至るところに現われている、日本を神国として優越視する和

8) 近松門左衛門『国性爺後日合戦』『近松全集』第10巻（岩波書店、1989）18、19頁。

藤内の母の発言などは、日本中心主義の立場に立った近松の民族意識の表出と見られる⁹⁾。結局、中国人の父と日本人の母の間に生まれた鄭成功は、日本では近松によって日本優越意識を象徴する和籐内という人物に変形されるようになったのだ。

〈参考文献〉

- 重友毅『「国性爺合戦の成功について」』『重友毅著作集 近松の研究』第三卷（文理書院、1972）
 斎藤一寛『坪内逍遙と比較文学』（二見書房、1973）
 水谷不倒「国性爺の虎」『水谷不倒著作集』第三卷（中央公論社、1974）
 寺尾善雄『鄭成功』（東方書店、1986）
 任鴻章『近世日本と日中貿易』（六興出版、1988）
 荒野泰典『近世日本と東アジア』（東京大学出版会、1988）
 小笠原幹夫「近松の華夷思想」『作陽学園紀要』24巻1号（作陽学園学術研究会、1991）
 山口修『日中交渉史』（東方書店、1996）
 岩波講座歌舞伎・文楽『近松の時代』（岩波書店、1998）
 大庭脩『徳川吉宗と康熙帝』（大修館書店、1999）
 林田芳雄『鄭氏台湾史』（汲古書院、2003）
 松浦章『海外情報からみる東アジア』（清文堂、2009）
 拙著『文禄・慶長の役（壬辰・丁酉倭乱）』（講談社メチエ選書、1994）
 拙著「近松門左衛門の『本朝三国志』に関する考察」『日本文化学報』第3集（韓国日本文化学会、1997.5）
 拙著「近松の『国性爺合戦』に関する考察」『日本学報』第53集（韓国日本学会、2002.12）

9) 和籐内の母は「中国を照らす日の光も日本を照らす日の光も光が二つではないが、太陽の根源という日本は太陽が始まる所で、仁・義・礼・信の道がある。慈悲を施す神国で生まれたこの母が」（『国性爺合戦』前掲書、704頁）というように「日本」という国名を太陽が始まる神国として説明している。